

サプライチェーンの中国リスク

中国に過度に依存したサプライチェーンを築くことのリスクについて、様々なレベルで検討されている。

政府のレベルでは、安全保障や経済リスク分散の観点で議論されている。医療用マスクに象徴されるように、いざとなると重要な機器や部材が中国に依存しすぎていたことが分かった。食料やエネルギーの安全保障の議論は長くなされてきたが、医療機器や産業機械についての議論はほとんどなかった。



伊藤元重の

エコノウオッチ

検討されているはずだ。何かと貿易を政治的に利用する中国である。突然部品が入ってこないような事態もあるかもしれない。

そこで部品調達の日本国内や第三国への移転や、販売先の中国集中見直しを検討されることになる。中国との貿易問題は、米中摩擦の動きにも大きな影響を受ける。ファーウェイのケースに代表されるように、米国は中国企業のグローバルな調達や販売に制限を加える行動に出ている。こうした動きは日本の企業にも影響が及ぶことになる。こうした報道に日々接し

日本企業、過度な依存警戒

していると、西側諸国による中国市場の分断との視点になりがちだ。しかし、中国側から見ても同じようなことが起きている。

先日、あるテレビ会議で中国のエコノミストが強調

していたが、中国はこの5年ほどの間に大きく構造改革が行われ、経済の外需依存度が非常に低くなったという。その発言の中には、部品や素材の調達でも過度な対外依存を軽減し、中国国内で調達できるようにする、との意欲が含まれていたように感じられた。

実際、ファーウェイが米国の圧力で台湾メーカーなどの半導体を調達できなくなる中で、中国国内で半導体を調達できるように巨額

の投資が行われている。

米国側からも中国側からもサプライチェーンの分断が少しずつ進んでいるように見える。こうした流れの中で日本企業がどう対応するのが問われる。

中国がWTO（世界貿易機関）に加盟したのは2001年末のことだ。それから約20年の間に、国際貿易の姿は大きく変化した。国境を越えた分業の拡大と深化だ。一つの製品が生産されるまでの部品や素材が様々な国で生産され、その中で中国が果たす役割が非常に大きくなっていった。中国から部品や素材が来ない

が止まってしまう企業も少なくなかった。

サプライチェーンの見直しの動きは、中国への対応というレベルにとどまらな

いだろう。コロナで国境が閉鎖されていることなどもあり、欧州などでもサプライチェーンの見直しの必要性を問う声が大きくなって

いるようだ。過度に国境を越えた分業を進めていったこの20年のグローバルの動きが、大きく方向転換を始めているのかもしれない。

サプライチェーンの見直しの先にどのような国際分業の姿があるのか、企業のグローバル展開の姿はどうなるのか。これもポストコロナ社会の重要な検討事項だろう。

（学習院大学国際社会科学部教授）